

---

# 完璧

今井 祐一

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

完璧

### 【コード】

N8044B

### 【作者名】

今井 祐一

### 【あらすじ】

どうして完璧の‘へき’は‘かべ’じゃないんだろう？一度でも  
そう思ったことのある方、必見！たった一語に秘められたドラマ！

## 第一回（前書き）

背景の説明がほとんどです。つまらないと思ったら飛ばして、第二回へ進んでください。

完璧

## 第一回

とある街の、とある駅前。儒服を着た、年配の男性が旗の下で何やら語りを聞かせている。

その隣りにのぼりが立っている。大書された文字はたった二文字。「完璧」と。

「みなさん、完璧の壁は何故、壁でないか不思議に思ったことはございませんか？ 昨今は漢字にしたってケータイやらパソコンで変換すれば何でも出てきますんで、もう長い間漢字なんか書いたこと無いつて人も中にはいらっしやるかもしれませんがいかがでしょうか。ちよつと気になりませんか。気になる？ ありがとうございます。それでは、ここでその理由を少々お聞かせしたいと思います。」

そもそも漢字には一つ一つ意味がございますから、始めて見る言葉も知っている漢字の組み合わせであればなんとなく意味が分かるものです。完璧という言葉を見てきますとまず、完という字があります。これは皆さんご存知かと思えます。欠けているところの無いさまであります。完全、といった風にも使われますね。

では、壁のほうはどうでございましょうか。こちらはあまり目にしたことが無いかもしれません。最近では北京オリンピックのメダルの裏側に玉璧がはめ込まれているというのを聞いた方があるかもしれません。あれは古代の龍紋玉璧をイメージして作ったんだそうですが、ではそもそもこの璧とは一体何なのかと言いますと、一言でいうならば宝石であります。もう少し丁寧に説明しますと、翡翠ひすいやガラスなんかを平らなドーナツ状に作ったものなんです。

さて、こうして漢字を一つずつ見てまいりますと少しずつ完璧の

意味が見えてきたのではないのでしょうか。簡単にいてしまえば瑕きずの無い玉といったところでしょうか。そこからでも欠点が無くすばらしいという意味も想像できますが、実はこの二文字にはもっと深いドラマが隠されているのであります。

実はこの言葉はある文章の中から抜き出してきたものでして、原文はこのようになっております。城不入臣請完璧歸趙、と。これでは何のことか分かりにくいですから書き下し文に直しますと、城入らずんば、臣請う壁を完まっしうして趙に帰らん、とこうなります。訳しますと、城が手に入らなければ、壁は持ち帰って見せます、ということになります。よけいわかりにくくなった？これは失礼。では事の顛末を最初から順を追ってお話しすることに致しましょう。

時は今よりさかのぼることおよそ二千三百年、秦しんという大帝國が中華を統一するよりも少し前のこと。いわゆる中国の戦国時代のこととでございます。この頃は既に秦がほかの国より抜きん出て強く、その他の国は自らを守るために秦と結んだり、他国と手を結んで秦に敵対したりして鬭争を繰り返しておりました。

その中に、趙じやう、という国がございます。趙は秦と境を接しており、それゆえ秦の脅威をまともに受ける位置にあるということとはご記憶願いたいと思います。国の規模はさほどに小さいわけではありません。秦に比べれば多分に見劣りするものの、その他の国の中では強大といつてよいでしょう。

趙はある時、和か氏の壁、なるものを手に入れました。結論から言えばこれが壁の正体であります。和か氏の壁、はもともと南方の楚そという国の国宝なのですがどうしてこれが趙にやってきたのかというのとはつきりしません。史記には一言、趙の恵文王けいぶんおうの時、楚の和氏の壁を得たり、とあるのみです。が、まあとにかく趙は天下に二つとない宝を手に入れたのです。これを秦が聞きつけました。この時の秦王は始皇帝の曾祖父にあたる人で、昭襄王じやうきやうといいます。単に昭王とされるときもありません。昭襄王は趙が和氏の壁を手

に入れたと聞いて、何を思ったか和氏の璧をくれ、と趙に申し入れました。くれというのは言い過ぎかもしれませんが。正確に事実を述べますと、趙に使者を送ってこう伝えさせました。和氏の璧を十五の城と交換してほしい、と。

これを聞くとなんだか昭襄王はただの宝石マニアのように聞こえます。それはそうでしょう。何しろ宝石を城、つまりは領土と交換しようとしているのですから。しかもこの時代、一つの城を落とすのに一年かかるとさえいわれていたのです。こういつてしまつとより彼の異常さが際立ってしまうのですが、価値感覚についてはこの当時はこんなもんだつたと理解してもらつことにしましょう。で、じゃあ昭襄王が和氏の璧を欲しがつたのは彼が宝石マニアだったからかといえば別にそういうことではありません。これには秦の外交上の思惑というものが絡んできます。

秦と趙とはこのとき同盟を結んでいます。形の上では対等ですが、実際のところは秦が趙を組み敷いているといつてもいいでしょう。その中で趙に和氏の璧の交換を持ちかけるといのは、その同盟関係の確認であり、また逆らえばどうなるか分かっているだろうな、という無言の恫喝をも含んでいます。きつい言い方をすれば、趙の秦に対する忠誠心を確かめようとしているという言い方になりましようか。

もう一つの読み方があります。これはある作家さんの推測ですが、和氏の璧は楚から趙へ送られたものではないかという前提で話が進みます。確かに国宝が何の理由も無く、一人で趙に歩いていったというのは考えられませんから、妥当な推論といえましよう。

さてここからさらに先へ話を進めるに当たつては、秦と楚との外交上の関係にも言及しなければなりません。

この時の楚王は頃襄王けいじょうおうといひます。彼は秦を憎んでおりました。彼の父、懐王かいおうは秦に殺されたからです。実際には非は懐王の方にあるのですが、こういふときは決まって、秦に、殺されたという一事が重きをなします。とにかく秦が憎い。なんとか秦をぎゃふんと言

わせてやりたい、父の仇を取りたいと頃襄王は思いました。ところが楚一国では秦にかないません。かなわないどころか、逆に滅ぼされてしまうかもしれません。そこで目をつけたのが趙です。趙に国宝を送って密約を結び、共に秦を倒そうというわけです。

一方の秦はこの頃、軍事よりも外交のほうを重視して各国を手なずけようとしておりました。その過程で楚とも同盟を結んでおります。結んでおりますどころか、昭襄王が趙に楚から和氏の璧が渡ったとの報せが届いたのは同盟締結の直後なのです。璧が趙に渡ったというのはとりもなおさず密約の成立を意味します。それを知った昭襄王は怒りました。すぐに楚を攻めようと思いました。しかし、側近が楚を攻めるのはその裏切りの証拠を天下に示してからだというので思いとどまり、秦は趙と楚の密約を知っているのだぞ、という脅しも込めて趙へ使者を送ったというわけです。

趙は、困りました。密約を知られてしまったということもありま  
す。が、もしこのことが無かったにしても趙としては苦しい立場に置かれているのです。

何のことは無い。たかが宝石一つで領土が手に入るのならば宝石などくれてやればいいではないか、とお思いになるかも知れませんが、それはそうなのですが、趙と秦とを比べてみると秦の方が強いのです。璧を渡した後で、城のことなど知らんと突っぱねられてしまえばそれで終わりです。趙は泣き寝入りです。また、秦の属国になったように聞こえも悪い。かといって渡さないといえれば国交の断絶と戦争を招いてしまいます。それも避けたい。恵文王は大臣たちと議論を重ねましたが、いっこうに良案は浮かびません。この間、秦の使者は待たせてあるのですがいつまでたっても返事をしないというと璧を渡さないという意味表示になってしまふのでそれま  
ずい。どうしようもない、という段になって繆賢ミウケンという者が言を揚げました。

「私の家臣で藺相如リシヤウジというものがおります。この者ならば使者として適任かと存じます」

この繆賢という者は趙の宦者令という職にありました。宦者令とは宦官かんがんの長です。宦官とは主に後宮で君主に仕える去勢された男子です。後に自ら志願して宦官となり、政権を握ろうとする者も現れてきますが、この時代においては宦官といえれば必ず犯罪者であり非常に軽蔑されておりました。しかし君主の身のまわりの世話をする彼らはそれだけ君主に近づく機会も多く、時には奥向きのことだけでなく政治一般についても相談を受けていました。繆賢もそのような宦官の一人で、大臣たちの会議には出席していなかったものの、恵文王から相談を持ちかけられたか、あるいは王が悩み苦しんでいるのを見かねたということでしょう。

さて、新たな解決策を提示された恵文王ですが、じゃあそれにしようとして軽々しく決められるわけも無く当然その訳を尋ねます。何しろ一国の命運がかかっているのですし、この任務は困難を極めるものです。滅多な者では務まりません。繆賢は昔話を始めました。

昔、私は罪を犯し、ひそかに燕えんへ亡命しようとしたことがございました。ところがその時藺相如はわたしを止めようとしました。

「君（繆賢）よ、燕王とはどういったお知り合いのですか」

わたしは王に従って国境のあたりで燕王にお目にかかり、そのときに燕王はわたしの手を握って、交わりを結びたいと仰せになった。そうして知り合ったので燕王の元へ行こうと思うのだが、と言いました。すると彼はこういいます。

「それは趙が強くて燕は弱く、その上君は王の寵臣ちゆうしんです。だから燕王は君と付き合いたいと思っただけです。もしも今、君が燕へ亡命すれば、燕は趙を恐れているので罪人をかくまって趙に咎められるのを恐れ、当然のことながら君の滞在を認めず、拘束して趙に送り返すでしょう。それよりも、自ら肌脱ふしつぎになって斧質ふしつに伏し罰を受けたいといえれば、死罪を免れることができるやも知れませんか」

そこでわたしがそのようにしたところ、幸いにも王はわたしをお赦ゆるしてくださいました。ですから私は彼が勇士であり、智謀をも備え

ていると思つのです。彼ならば使者にふさわしいのではないでしようか。

肌脱ぎになり上体をあらわすということは服従や、降伏、謝罪などの意思表示で、斧質は斧と処刑台で処刑をあらわしますから、肌脱ぎになって斧質に伏し、というのは自ら罰を請う容かたちといったところでしようか。平たく言えば自首して謝れ、ということと言えましよう。

これを聞いた恵文王は他に良策があるわけでもないのです、とにかく藺相如を引見することにしました。そして秦が和氏の璧と十五城の交換を申し込んできた、どのように対処すればいいだろうか、と問いかけてました。藺相如は言います。

「秦は強く、趙は弱いのですから璧を渡すしかないでしょう」  
彼が考えるに、初めから渡さないという選択肢は無いのであつて、それならば最初からためらわずに璧を渡してしまえばよかつたのです。そうすれば、たとえ城を得ることは出来ずとも秦に攻められるという憂き目は見ずに済んだらうと思つています。国の威厳を損なうという意見に対しても彼は否定的です。生きるか死ぬかの瀬と際に、恥も外聞もあつたもんじやないというのが彼の真情ではなかつたでしょうか。

じつは藺相如は貴族の血を引いています。彼が生まれたときにはすっかり没落してしまつておりましたが。その生活はおそらくとても貧しいものであつたに違いありません。あるいはその日の食べ物も無い、というところまでいったかもしれません。そこで彼は、先ほどお話ししましたように宦官という非常に卑しい者の臣下となつたのではないでしようか。彼は落ちぶれたとはいえ、貴族としての自覚もあつたでしようし、顕揚欲もありましたから、それには大きな覚悟が必要だつたに違いありません。宦官の家臣になるといふかは自ら出世の道を閉ざしてしまうことであつたでしようから。そんな彼にとっては青ざめた顔をしてああでもない、こうでもないとい

う大臣たちが滑稽に映っていたことでしょう。

が、そのことは心の内だけのことでして、まだ王の問いは続いております。

「もし秦に趙の壁を与え、秦から十五城を得られなかったらどうする」

恵文王にとってはこのことが悩みの種なのです。

「秦が交換を持ちかけているのに趙がこれを断れば非は趙にあります。一方、趙が壁を渡したのに秦が城を譲らないならば非は秦にあります。この二つを比べてみますと、秦の要求を呑み、秦に非を負わせるのがよいかと存じます」

当然のことでしょう。藺相如も誰にでも分かることではないですか、と言いたかったかも知れませんが、そこは大臣たちの面子もありますので黙っておりました。

「使者は誰がよいか」

「王に心当たりがないのであれば、わたくしが壁を奉じて秦へ行き、城が手に入れば壁を秦に残し、城が手に入らなければ、壁は持ち帰って見せます」

そう、ここが先ほど引用いたしました「城不入臣請完璧帰趙」という部分でございます。

かくして藺相如は使者として秦へ赴くこととなりました。趙王の陪臣ばいしんでは使者として不資格なのでおそらくこの時点で彼は趙王の直臣じしんとなったのでしょうか。しかし喜んででもいられません。この任務、生きて帰れる公算は無きに等しいのですから。

さて、ここで今日は時間とあいなりました。この後、秦へ使いた藺相如の命運やいかに？また次週、同じ時、同じ場所でお目にかかりましょう。では皆さんごきげんよう。次回をお楽しみに」

## 第一回（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
（月1回・PC版のみ）

完璧

## 第二回

とある街の、とある駅前。儒服を着た、年配の男性が旗の下で何やら語りを聞かせている。

その隣りにのぼりが立っている。大書された文字はたった二文字。「完璧」と。

「さてみなさん、本日も集まりいただき、まことにありがとうございます。先週は完璧という言葉の由来について、藺相如が秦への使いとなったところまでお話いたしました。初めての方もいらっしやるようですし、説明が長いものですからかえってわかりにくかった、なんて方もいらっしやるかもしれませんので前回のあらずじをここでもう一度お話ししましょう。

まず、趙という国が、和氏の璧、という国宝級の宝石を楚という国から、もしかすると秘密同盟の証として、手に入れました。それを聞きつけた秦が外交政策の一環として、趙に和氏の璧と十五の城との交換を申し込んできました。その申し出というのは脅しを含んでおりまして、もし断れば国交の断絶と戦争を招いてしまいます。秦は大国なので力ではかありません。しかし、璧を渡しても十五城が手に入るといふ保証はありません。璧を奪われて泣き寝入りになつてしまうかもしれません。趙は君臣とも困り果ててしまいました。そんな時、宦官の長、繆賢という者が藺相如ならば使いを果たすことができる、と趙の王、恵文王に打開策を提示しました。そこで自ら藺相如を引見し、彼が勇士であり、智謀も持っているのを見て恵文王は彼を秦への使者としたのでした。ここまでは前回までにお話ししたかと思えます。

さて、藺相如と彼を中心とする使節団は趙の都、邯鄲かんたんを出発して、歩を南へ向けたのではないかと思われます。少し西によりながら黄河まで下がり、黄河に沿って西進し、秦の都、咸陽かんように入ったことであらうと思います。

邯鄲という町は山東半島の付け根から真西に進んで、太行山脈とぶつかる手前、華北平原の西端にあります。この当時は趙の都として大いに栄えており、堅固な城壁で町はぐるりと取り囲まれておりました。後に始皇帝が生まれた地であり、邯鄲の夢、邯鄲の歩み、といった故事でも知られております。これらの故事については、また機会がございましたら皆さんの前でご披露させていただくことにしたいと思います。なお現在は石炭やセメントなどの盛んな工業都市となつていそうであります。

一方咸陽のほうですが、こちらは名前のほうからまず説明をしてみたいと思います。‘陽’という字は山の南、河の北を表します。また‘咸’という字は‘みんな’という意味を表す字であります。この都市は陽という字の意味を二つとも満たしております、そのため咸陽、みな陽、という名前が付けられたのであります。

この地が都となつたのは昭襄王の祖父、孝公のときであります。彼の在世中に秦は商鞅じやういやくの改革によって法治国家へと生まれ変わり、それによつて中華一の強国にのし上がったのでした。

咸陽は関中、あるいは関西と呼ばれる地域にあります。この関というのはいは具体的には、ある関門を指し示しております。知つていの方もあるかもしれませんが、その関門とは函谷関かんくわんです。この関門は難攻不落という言葉がぴったり当てはまる場所で、抜かれたことはほとんどありません。ちなみに項羽はこの関門を破つた数少ない一人であります、鴻門こうもんの会の直前に函谷関を閉ざしていた劉邦りゅうほうの軍勢と戦いこれを突破しております。

藺相如もこの関門を通つたことでしょう。これを越えるといよいよ秦の中心部です。

使節団の者は秦に使いするのだということは聞かされておりましたけれども、その内容まではほとんどの者が知りませんでした。せいぜいどうやら何か贈り物を持っていくのだそうだと、という程度のことにはしか思っておりません。ですから、この使いが趙の命運を握っているなどは露ほども頭の中にもありません。その認識をもっているのは藺相如と副使の者だけでありました。

この副使は先祖代々趙に仕えているもので、誠実さのほかには何のとりえもない男でした。位はまあそれなりで、それなりということとは趙の副使としてそれなりということでしたが貴族には違いありません。それでどうしても彼の上司がもともと宦官の家来であったことが気に入りませんでした。それで誠実と言えるのか、と思われる向きもありましたが、当時の感覚としては当然というべきで、そもそも宦官というものはおよそ人ではない、いわば影のようなものだと考えられておるのですから、彼の目には上司は影以下の何者かという風にしか映っておりませんでした。が、しかし、副使の任務は趙王から与えられたものですから逆らうわけにはいきません。こういったことと、さらには任務の内容とがあいまって彼の顔は暗く沈んでいるか、青ざめているか、とにかく首から上はいつも下を向いておりました。

一方彼の上司の方はどうかといえますと、こちらはずっと上を見上げております。何を見ているのか、と問われると彼は一言、「天」

とだけ言いました。その顔はきりりとしまり、口は堅く結ばれております。その決意に満ちた顔つきを見て、周りの者はなんとなく声をかけ辛くなりました。

彼は一体何を考えていたのでしょうか。

藺相如は人一倍旺盛な名誉欲と、それに劣らぬ愛国心の持ち主でした。いつか没落してしまった自家を再興するのだという思いと、それをするなら故郷の趙でなくてはだめだ、という思いが同居しております。そのために、かつて学問をしながら各国を流れ歩いてい

たときも、仕官しないかと言う誘いをすべて断って生国に帰ってきた程でした。繆賢に見出されたときは、さすがに宦官に仕えるべきかと悩みましたが、彼が王からたびたび諮問を受けるということを伝え聞いており、ひよっとすれば自分のことが王の耳に入るかもしれないと思い、また生活が立ち行かなくなっていたこともあって彼の家来となつたのでした。

結果として、彼の選択は正解でした。いや、正解になるかもしれないと言ったところででしょうか。もしも使いに失敗すれば、下手をすれば秦王に殺され、生きてかえっても趙王に首を刎ねられてしまふかもしれないのですから。ところが彼は不思議とそんな不安を一切感じませんでした。使者に任命された時点でうまくいったという感があり、またもし自分が死ぬ結果になつたとしてもその死はおそらく自分の才能の無さよりは殺す側の器量の狭さによるものだと考えております。

秦王によつて殺されるならば、秦は璧を奉じてやつてきた使者を殺して趙から璧を奪い取り、自ら持ちかけた城と璧との交換の申し出を自ら踏みにじることになり、天下の諸侯はみな秦に非ありと見て趙に同情するでしょう。そうすれば自分の死は趙のために役立つたことになります。彼は別にそれでもいいと思いました。あるいは趙王が自分を抜擢したのも、もし自分が秦王に殺されても趙は賤臣を失うだけで天下の輿望を秦から離すことができると考えたためでないかという考えすら浮かびました。安い買物、という訳です。

趙王に殺される、ということはないという確信がありました。恵文王は道理をわきまえており、滅多なことで自分を処刑したりしないはずだと思っております。ただし、処刑されるような失敗はないという自信もありました。

いずれにせよ、結局は天が決めることであり、己が天に恥じぬ行動をとればそれでよい、天よご照覧あれ、といった覚悟が出来上がっております。そういう気持ちでもって天を仰いでいたに違いありません。何か不思議な高ぶりが彼を包み込み、またそれが徐々に

使節団全体へと広がっていきました。

副使の方もこの藺相如の居住まいに知らぬ間に感化され、やがてずっと地面ばかり見ていた顔が段々前を向くようになってきました。宦官の家来の部下に甘んじている、といった最初の意識もいつの間にか消えております。彼自身もそうした自分の心の変わりように不思議さを感じずにはおれません。それが上司の堂々たる姿によるものだと思えば、自然と上司に対する物腰にも変化が現れます。そして彼もまた藺相如と同じく、一種自らの命を大海に放り出してその行き着く先を運に任せるような、そんな気持ちにもなるのであります。

秦の都、咸陽に着いた一行は翌日秦王との会見に臨みました。このとき秦王は正式な宮殿ではなく、章殿といわれる属国の君主などが秦王に拝謁するときに使われる宮殿を使用しました。このあたりにも秦の高圧的な姿勢がうかがえます。もっとも秦の側からみれば大臣でもないような使者との会見にわざわざ正殿を使うこともない、ということと言えるかもしれません。

藺相如は璧をささげてすすみました。

秦王は璧を受け取るとたいへん喜び、そばに侍っていた侍女や側近たちにもまわして見せました。側近たちは皆そろって、

「万歳」

と、唱えました。

藺相如は一步下がってこれを見ておりましたが、秦の態度が礼を欠いていること、さらには趙の手に渡るはずの城を示すものが見当たらないことから、

秦は趙に城を渡すつもりはない。

と、見て取りました。この当時、城を与えるということはその周辺の土地をも与えるということ、いわゆる領土割譲なわけですが、戸籍に地図を添えて相手に渡すという手続きをとります。この場ですぐにその手続きを踏むということはないにしろ、趙が璧を渡した

時点で秦も与える城を明確にするのが筋というもののなのです。ところが昭襄王は侍女や側近たちと共に璧を鑑賞するばかりで一向に十五城を示そうという気配は見られないのです。

このことは藺相如の想定の中にあり、彼は後ろで怒りに肩を震わせている副使を目でなだめるとすつと前へ出て、

「璧に瑕きずがあります。それを王にお見せ致しましょう」

と言つて昭襄王たちを驚かせ、璧を受け取りました。

副使も名宝、和氏の璧に瑕があるとは知りません。まさか、という顔をして上司の背中を見ております。彼には藺相如が一体何をしようとしているのか見当もつきません。

と、その時藺相如は璧を持ったまま後ずさりして宮殿の柱に寄りかかりました。その形相たるやすさまじく、司馬遷は『史記』の中で怒髪上衝冠、怒髪冠を衝く、と表現しております。髪が逆立つて、冠を衝き上げそうだった、というのです。

これを聞いてピンと来た方もいらつしやるでしょう。そのとおり、この怒髪冠を衝く、こそ怒髪天を衝く、の元の形なのです。冠が天へと変わったのは、そのほうが怒りの程度をより甚だしく見せるからか、あるいは単に庶民は冠をつけないからか、とにかく昔からの言い回しというのはこういうところに端を発していることがよくあるものです。

おや、いま雷の音がしましたね。どうやら一雨きそうです。風邪など引くといけません。どうも中途半端で申し訳ありませんが、今日のところはこのあたりで失礼させていただきますと思います。次週、また同じ時、同じ場所でお会いしましょう。それでは皆さんごきげんよう」

## 第二回（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
（月1回・PC版のみ）

完璧

### 第三回

とある街の、とある駅前。儒服を着た、年配の男性が旗の下で何やら語りを聞かせている。

その隣りにのぼりが立っている。大書された文字はたった二文字。「完璧」と。

「さてみなさん、本日も集まりいただき、まことにありがとうございます。先週は完璧という言葉の由来について、藺相如りんしやうじよが秦へと使いし、会見の場で秦王を睨みつけたところまでお話したかと思いません。いよいよこれから物語は最高潮、といったところですがまずは例によってこれまでのあらすじをもう一度お話ししましょう。

まず、趙ちやうという国が、和かし氏の璧へき、という国宝級の宝石を楚そという国から、もしかすると秘密同盟の証として、手に入れました。それを聞きつけた秦が外交政策の一環として、趙に和氏の璧と十五の城との交換を申し込んできました。その申し出というのは脅しを含んでおりまして、もし断れば国交の断絶と戦争を招いてしまいます。秦は大国なので力ではないけません。しかし、璧を渡しても十五城が手に入るといふ保証はありません。璧を奪われて泣き寝入りになっってしまうかもしれません。趙は君臣とも困り果ててしまいました。そんな時、宦官の長、繆賢むけんという者が藺相如ならば使いを果たすことができる、と趙の王、恵文王けいぶんおうに打開策を提示しました。そこで自ら藺相如を引見し、彼が勇士であり、智謀も持っているのを見て恵文王は彼を秦への使者としたのでした。

完璧

秦で秦王と会見した藺相如はその態度に誠意がなく、十五城を渡す気はないと判断し、璧に瑕きずがあると偽って璧を取り戻し、璧を持つたまま傍らの柱に寄りかかりすさまじい形相で秦王を睨みつけたのでありました。ここまでは前回までにお話ししたかと思いません。

怒髪冠を衝く、逆立った髪の毛が冠を押し上げる、とまで形容されたその迫力にその場にいたものは身動きできなくなってしまいました。そうして誰もが静まり返ったところで藺相如はおもむろに口を開きました。

「陛下は璧を手に入れるため、趙に使者を遣わせなさりました。趙王はそれを受けて秦に璧を与えるべきか、家臣を集めて議論いたしました。秦は貪欲で、強大であるのをいいことに、嘘をついて璧を求めようとしているのだから、璧を渡しても城を得ることはできない、という意見が強く、いったんは交換には応じないということでした。話がまとまったのです。しかしわたしは考えました。庶民の間でさえ互いにだましあつたりはしない、ましてや大国どうしが欺きあつたりすることがあるうか。それにたかだか璧一つのことと秦との友好を損なうべきではない、と。幸いにも趙王は私の意見をお聞きくださり、斎戒すること五日、私に璧と親書を託して使者となさいました。それは秦に敬意を表するためのことです」

ここで彼は一旦言葉を切りました。そして大きく息を吸い込み、より一層力のこもった声で秦王に詰めよります。

「ところが今の、陛下の態度はどうですか。わたしを多くの家臣たちの目に晒し、礼儀を欠くことの上ありません。璧を受け取るやそれを侍女につたえ、わたしを愚弄しました。それをわたしは陛下に趙へ城を与える気がない、と受け取りました。そのためにこうして璧を取り返したのです」

ここでもまた、藺相如は間をとります。そして更に、ほとんど叫ぶようにして昭襄王に迫ります。

「陛下がわたしを殺そうというのならそれもよろしいでしょう。それならばわたしは今、この柱に璧もろとも頭をぶつけて砕いてしましましょう」

言い終えるや否や、璧をふりかざし柱にぶつけようとしてきました。

周囲は水を打ったように静まりかえっております。藺相如がまさに、壁をぶつけようとしたその時、

「やめよ、……そなたの言うこと、もっともである」

昭襄王がかるうじて声を絞り出しました。この声は、ともすると遠くに聞こえる都の雑音にかき消されてしまいそうなか細い声でしたが藺相如にとっては思惑通りの展開でしたから、ぴたりと動きを止めて昭襄王の動きを待ちました。

昭襄王はすぐに側近たちに命じて地図を持ってこさせ藺相如に趙に与える土地を示しました。藺相如はこれを受けて、

「和氏の璧は天下に名高い名宝です。趙王はこれを送り出すに当たって五日間齋戒いたしました。それゆえ陛下も五日間齋戒なさり、宮廷に九寶きゅうほうを設けなさいましたら、私は必ず璧を献上いたしますしよ  
う」

と応じました。齋戒、というのは神を祭るときに、飲食を慎み、心を清めて、家に閉じこもることであります。潔斎と言いかえてもいいでしょう。また、九寶を設けるといいうのは家臣をそろえて盛大に、といったところでしょうか。とにかく最高級の礼をもって璧を受け取るよう秦に求めたのであります。

これを受けて昭襄王は藺相如を広成伝という最高級の宿舎に泊め、齋戒をしようとした。

宿舎に案内されて一息つくくと、副使は藺相如を、

「よく、なさいました」

と褒め称えました。その目には感動の灯がともっております。従者たちも尊敬と賞賛の目で彼を見上げております。彼は趙の名誉を守り、秦から約束どおり十五城を引き出したのです。少なくとも彼らの目にはそう映っております。しかし、藺相如は目を閉じたままうつむいております。そこには任務を果たしたという達成感や安堵感は微塵も感じられません。例えていうならば、戦陣におもむく武人のたたずまいといったところでしょうか。

彼が何も言わないので、彼らの興奮は冷めてしまいました。重苦しい空気があたりを包みます。副使は何かまずいことを言ったかと不安になってきました。一瞬が一時間にも感じられるような長い間の後、藺相如は目を閉じたまま人払いを命じました。

彼は静かに目を開け、自分と副使しかその場にいないことを確認すると押し殺したような声で言いました。

「副使殿、われわれは死なねばならぬ」

副使は己が耳を疑いました。自分たちは立派に任務を果たしたはず、なぜ死ななければいけないのか。一方ではそうした自分の常識的判断と、しかし他方では藺相如がそう言うなら自分も死ななくてはならないのではないか、という思いが交錯いたしまして表情に疑問が浮かびました。

それを見て藺相如はもう一度、死なねばならぬ、といつてから更に続けました。

「秦は、十五城を譲る気はない」

なぜなら、と言葉を継ぎます。

「先ほど秦が提示した地図の中には、秦の要地が含まれているからだ。秦がそこまで趙に好意を見せることはありえない。それゆえ」

「そう言って副使の目を見、そしてまたわずかに伏せてこう告げました。」

「壁を趙へと送り返す。壁を、秦に渡すわけにはいかぬ。斎戒は、その時間稼ぎの口実に過ぎぬ」

うつむき加減で彼の話を聞いていた副使の顔は、弾かれたように上がりました。

「それでは趙が一方的に約束を破ったことになりませんか」

そう懸念を口にします。

「その通りだ」

副使は、ではなぜ、と口を開きかけて息を吸いました。そこで、その顔に電光が走りました。

「われわれはその責任を背負って死ぬのだ。われわれは城を受け取らぬ限り壁を渡すわけにはいかぬ。城を得られぬならば、壁は趙に返すほかない。だが、われわれがここを去ることもまたできぬ。秦王に申し開きをし、趙に非がないことを明らかにせねばならぬ」  
しかし、と彼は続けます。

「たとえ秦に非があろうとも、秦は虎狼の国だ。われわれの言い分に納得することはあるまい。結果」  
「そこで彼は息を継ぎました。

「われらは秦に殺されよう」

二人の密談はそれで終わりました。藺相如は従者の中から目端のきく者を選び出すと、ぼろを着せ、壁を隠し持たせ、ただひたすら趙を目指せと言い含め、すぐに彼を出発させたのであります。彼を見送った藺相如は副使に一言、

「たとえ殺されようとも、令名は残ろう」

と力強く言いました。その言葉に副使も深く頷きました。覚悟は出来上がっております。

五日後、昭襄王は齋戒を済ませ、今度は章台ではなく正式な宮殿で、最高の礼をもって藺相如を迎えました。藺相如は死を覚悟して静かに、しかし確かな声で秦王に言上しました。

「秦は穆公以来二十代あまり続いておりますが、いまだかつて約束を堅く守った君はいらっしゃいません。それゆえ私は陛下に欺かれ、趙王から賜った使命を果たせなくなってしまうことを恐れました」

昭襄王や側近たちの顔が険しくなりました。藺相如はあからさまに秦王家を貶めているのですから、それも当然のことでしょう。しかし、次の言葉で彼らの顔から血の気が引くことになりました。

「そこで私は壁を趙へと持ち帰らせました。おそらくもう国境を越えているかと思えます」

これを聞いて周りの者は赤くなるやら青くなるやら。もつとも、時間と共に赤い者が増えてはきます。藺相如の言葉は更に続きます。

「しかしながら、言うまでもなく秦は趙より強いのですから、陛下が使者をお遣わしになって壁を求めれば趙は直ちに壁を奉じてまいらるでしょう。その前に、十五城を割いて与えたならば、趙は約束をたがえて陛下のお咎めを受けるようなことをしましうか」

藺相如はここで昭襄王や側近たちの顔を見渡して、こう付け加えました。

「わたしが陛下を欺いた罪は死に値します。どうか釜ゆでの刑に処していただきたい。陛下はこのことを群臣と討議なさいませ」

昭襄王とその周りの者たちもここまでくると顔を見合わせてあきればかりであります。はっと我にかえった者の中には藺相如をひつとらえようとする者もありました。

「やめよ」

昭襄王の声です。藺相如を捕らえようとした者たちは動きを止めました。

ここで昭襄王は非凡な器量を発揮しました。あるいはこのとき彼は二十台の前半ですから、藺相如に見られたこの種の得難い勇気を好み、彼を殺してしまいたくないと思ったのかもしれない。とにかく彼はこの気骨あふれる使者を生かして帰すことに決めました。

「いま、この者を殺したとて壁を手に入れることはできぬ。それどころか秦と趙との誼よしみを絶つてしまうこととなる。ここは彼らを優遇して帰国させたほうがよい。趙も壁一つのこと秦を裏切ったりはするまい」

そして何事もなかったかのように宮殿で藺相如を引見し、儀式を終えた後に彼を帰国させたのであります。

帰路、函谷関を過ぎ、副使をはじめ従者たちは安堵のため息をもらしました。彼らの胸は感動で高鳴っております。はじめは使いの目的も知らなかった者たちもその内容を聞いて驚きの声をあげるとともに、藺相如の勇氣と智謀を褒めたたえ、趙の名誉を守った彼を畏敬のまなざしで見つめております。今、目の前を進むこの人は命

をかけた弁舌で国を救った、まさしく英雄でありました。

藺相如の胸にはまた違った感動が鳴り響いております。昭襄王は人をだますだけの王ではないことを目の当たりにしたかれは以後、趙と秦との友好に力を尽くすのでありました。

彼はまた、空を、天を見上げております。天は確かに彼を見ていたのです。その天に感謝を捧げるとともに、これから高位に登り、趙の社稷、つまり国家を担ってゆかねばならないと考えるとまた心が引き締まるのでした。

やがて一行は趙の都、邯鄲へと帰ってきました。城門のあたりに人はだかりができております。その中心には趙王、恵文王の姿が見えます。

彼は藺相如を送り出すとき、その死を予期しておりました。彼だけではありません。家臣たちも藺相如が生きて、任務を果たして帰るなどは夢にも思っておりませんでした。

藺相如が恵文王の前にひざまずいて拝礼します。それと同時に大きな歓声が沸き起こります。恵文王の身もまた、喜びで揺れております。先祖が自らを哀れんで藺相如を天から遣わしたのだ、とまで感じました。恵文王は彼を伴って歓喜に揺れる邯鄲の市街を抜けて宮殿に入り、復命を受けると、

「お前は賢大夫だ。使者となって秦王に辱められることがなかった」と言い、すぐさまその場で褒賞を与え、藺相如を上大夫に任じたのです。上大夫といえますと、大臣である卿とほぼ同格です。およそ三百人の家臣を養うことができます。宦官の一家臣に過ぎなかった藺相如は、使者として趙と秦とを一往復するだけで、大臣となつたのでありました。彼はまた趙の誇りを守り、国中からたたえられました。壁と国の威信を二つながら守り抜き、一つの落ち度も見せなかつた藺相如は、壁ヲ完ウス、と趙の国のみならず、天下にその名を轟かせたのであります。

そして、いつしかこの「完璧」という言葉は欠点がなく素晴らし

いということの例えとして使われるようになっていったのであります。

いかがでございましたか。実はこの後、大臣の位に昇った藺相如にはさらなる試練が待ち受けているのですが、これはまた別の話。機会がございましたらまたみなさんの前で披露させていただきたいと思えます。

ではみなさん、また会う日まで、ごきげんよう。さようなら「

### 第三回（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
（月1回・PC版のみ）

完璧

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8044b/>

---

完璧

2009年6月27日03時34分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。